

1 2 3 4 5 6 7 はP 1~2【天明3年「青森大火の図」】を参照

〈近世青森の誕生〉

御飯屋跡 1



青森町の町立ても最終段階を迎えた寛文11年(1671)、御飯屋が建設され、初代城代に大道寺宇左衛門が任じられました。城代は、貞享3年(1686)以降は置かれなくなり、青森町奉行の管轄となりました。

青森町奉行所跡地 2

善知鳥神社の東側、米町通と大町通の間(安方2丁目青森ビル付近)に、藩政時代の青森町奉行所がありました。貞享3年(1686)からは、青森町が町奉行の管轄となりました。町奉行の下には町年寄2名が置かれ、町政の実務を担当しました。町年寄は大町に居住し、この辺りは青森町の政治の中心地でありました。また、町奉行所の向かい側には制札場が設置されていました。

善知鳥神社 3



坂上田村麻呂によって再建されたと伝えられています。明治9年(1876)に成った『新撰陸奥国誌』によれば、寛永18年(1641)に代3代藩主信義によって再興されたとあります。明治6年3月に郷社となり、同年9月に県社となりました。境内には郵便局や警察署などが置かれたこともありました。また、昭和40年代までは、青森港の船にかかわる祭祀が中心だったいい、港町青森

のシンボルの神社といえるでしょう。

廣田神社 4



寛永2年(1625)に遷宮されたと伝えられています。これには異論もあるようです。また、延宝元年(1673)に青森城代に任じられた進藤庄兵衛正次が、同7年に境内末社である青森観音堂の再建に尽力したといわれています。市制60周年となった昭和23年(1948)に、明治43年(1910)の火災で焼失した正次夫妻の木像を復活させ、毎年7月18日には「進藤庄兵衛正次鎮徳祭」が行われています。

〈船と鉄道〉

旧青森大林区所(森林博物館) 5



現在森林博物館として親しまれているこの建物は、明治41年(1908)に旧林野庁青森営林局として建てられた、ルネッサンス様式の木造建築です。昭和57年(1982)の開館に際しては、一部改装されていますが、特別に復元された局長室では映画「八甲田山」のロケーションが行われました。

津軽森林鉄道の碑 6

津軽森林鉄道は、青森を起点として津軽半島一帯に路線を持つ日本最初の森林鉄道で、明治42年(1909)に完成しました。幹線部分は昭和42年(1967)に廃止と



なりました。この碑は、昭和48年に森林鉄道の用地を青森市に譲渡されたことを記念して建てられました。

青函連絡船・メモリアルシップ八甲田丸 7



青函連絡船八甲田丸は、昭和39年(1964)12月1日に就航。青函連絡船の最終日となった昭和63年3月13日下り7便、青森側からの最終便として運航が終了しました。同年7月9日から開催された「青函博」では、青森会場のパビリオンとして係留・展示されました。その後、青森駅構内から連絡船に続く車輛搬入口とともに保存され、現在、「メモリアルシップ八甲田丸」という名称で展示施設として利用されています。

浜町棧橋跡 8



大正4年(1915)の青森築港以前、浜町棧橋は数少ない交易の窓口でした。明治9年(1876)の明治天皇による東北・北海道巡幸に際して、7月16日に天皇が浜町の海岸から小船で蒸気船明治丸に乗船し、函館を経て20日に横浜港に到着しました。横浜到着の7月20日は後に「海の記念日」となりますが、現在聖徳(せいとく)公園内に「海の記念日発祥の地」の記念碑が建てられています。

東北本線跡(遊歩道) 9

青森の市街地が南の方へ拡大するためのネックと長年いわれてきたのが、東北本線の存在でした。これが、昭和43(1968)年10月よう



やく南側へ移転となりました。その跡地が整備され、現在は遊歩道緑地となっています。このうち、堤川から東に450mほどは「文芸のこみち」として、青森県出身の著名人の碑が14基設置されています。

青森製氷の倉庫 10



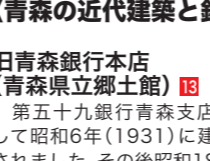
青森の製氷業は、鉄道網が発達して鮮魚の長距離輸送が行われるようになり本格化しました。当初は天然氷を使っていましたが、天候に左右されたり、天然氷に含まれる不純物が鮮魚に悪影響を及ぼすなどといったことがありました。そうした背景から、大正9年(1920)青森製氷株式会社が設立されました。

〈大町〉

(角大)大島商店 11



(丸毛)最上商店 12



旧青森銀行本店(青森県立郷土館) 13

第五十九銀行青森支店として昭和6年(1931)に建設されました。その後昭和18年の5銀行による合併により青



森銀行本店となりました。設計は堀江佐吉の7男幸治が担当し、現在は青森県立郷土館として使われています。

旧青湾貯蓄銀行 14

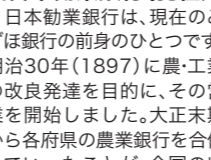
青湾貯蓄銀行は、明治33年(1900)2月に開業しました。貯蓄銀行とは、庶民に対して儉約を奨励して貯金により生活を安定させることを主な目的とした金融機関のことです。昭和20年(1945)7月28日の青森空襲で焼失することなく、空襲後は「東奥日報社」の編集局が入局したこともあります。昭和24年2月に青森商業銀行と合併し、これを最後に、貯蓄銀行は消滅しました。

旧青和銀行 15



大正10年(1921)に発足した青森貯蓄銀行が、昭和24年(1949)1月に普通銀行となり青和銀行と改称しました。その後、昭和33年に青森商業銀行を合併し、それから18年後の昭和51年に弘前相互銀行と合併して「みちのく銀行」となりました。

旧日本勧業銀行(孔雀苑) 16



日本勧業銀行は、現在のみずほ銀行の前身のひとつです。明治30年(1897)に農・工業の改良発達を目的に、その営業を開始しました。大正末期から各府県の農業銀行を合併していったことが、全国の県庁所在地には必ず支店を出すということの嚆矢となりました。青森支店は戦災による焼失を免れましたが、道路拡

張のため現在はその建物の半分が削り取られてしまっています。

〈寺町〉

常光寺 17

若狭国出身で、弘前高德院の住職であった天芸上人によって開かれた曹洞宗の寺院(弘前長勝寺末)です。慶安元年(1649)5月20日、常光寺の寺号が認められたといわれています。常光寺の隣にあった豊田呉服店には、当時旧制青森中学(合浦公園内にあった)に通っていた太宰治(ださい・おさむ)が下宿していました。



正覚寺 18



弘前誓願寺内の龍泉寺住持呑龍長老が開基で、寛永5年(1628)に寺屋敷が下されました。当初、寺号は寛正寺とされましたが、弘前の華秀寺(かくしゅうじ)と紛らわしいということで正覚寺となったといまいます。明和3年(1766)1月28日に起きた前代未聞の大地震では、青森町も甚大な被害を蒙りましたが、正覚寺の本堂は無事だったと伝えられています。そのため、「地震があったら正覚寺に逃げよ」といわれたそうです。

蓮心寺 19

広宣院教念が、寛永15年(1638)に青森に一字を建立したことから始まる浄土真宗大谷派の寺院です。



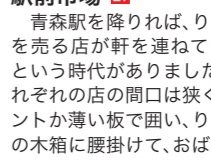
蓮華寺 20



心玄院日住上人が、承応元年(1652・異説もあるようです)に開基の日蓮宗の寺院です。また、日蓮の高弟であった日持上人が、永仁2年(1294)北海道へ渡海のおり数か月ここに留まり、庵を結んだことによって開かれたとも伝えられています。また、昭和20年(1945)7月の青森空襲では焼失を免れ、大本堂は一時市役所としても使われました。

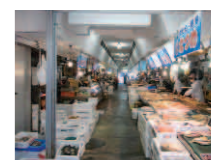
〈戦後の復興と市場〉

駅前市場 21



青森駅を降りれば、りんごを売る店が軒を連ねているという時代がありました。それぞれの店の間口は狭く、テントが薄い板で囲い、りんごの木箱に腰掛けて、おばあさんたちが商いをしていました。駅前大通に接した一角には、魚を商う店が並んでいました。こちらは陸奥湾で獲れたもののほかに、遠洋の鮭などを扱っていました。すぐ近くにある古川の市場との違いは、古川が小分けに安く近海物売るので一般の市民や小規模な飲食店の客が多いのに対し、駅前の市場はもう少しまとまった量を安く売るので、大量に仕入れたいなら駅前が良い、という点にあります。駅前の再開発に伴い、駅前市場は「アウガ」の地下で「新鮮市場」として営業を続けています。

古川市場 22



青森魚菜センター、青森公益魚菜市场、青森生鮮食品センター(青食センター)の3つの建物の総称。およそ40軒の店が連なり、朝は飲食店経営者、昼になると地域の人が買い出しに訪れます。昭和40年代から、青森市の台所として賑わってきました。主に陸奥湾の海産物が集まっています。そのルーツは、戦後に始まった闇市でした。近年は顧客が高齢化し店舗の数も減っていますが、市場の中を回りながら丼飯に少しずつ刺身などを載せていく「のっけ丼」で注目されています。